

東アジアにおける土器の起源について

王小慶

中国社会科学院・研究員（平成19年度 東北大学総合学術博物館客員教授）

The origin of pottery in East Asia

WANG XIAOQIN

Chinese Academy of Social Sciences, in Beijing, China

Abstract: The paper focuses on the earliest pottery which appeared around 10,000 BP in China, the Japanese Islands and the Korea Peninsular. It regards the origin of pottery as an innovation of the Human Beings to adapt to the dramatic climate fluctuation during the transition from the Pleistocene to the Holocene. The earliest pottery in the Southern and Northern China might have independent origin process. Although there are some similarities between the earliest pottery from the Northern China and the Japanese Islands, limited by current data, the implication of the similarities is still unclear.

はじめに

今から約 10,000 年前、地球が氷河時代の幕を閉じようとしていた時、自然環境の大きな変化に仕掛けて、世界のいくつかの地域で新しい文化の胎動が活発化した。東アジアでは、農耕や家畜の馴化が始まり、長い狩猟・漁撈・採集経済から脱皮した。そして移動的な生活から定居的な生活へと移行した。さらに、磨製石器の使用、土器の製作などの画期的な技術革新を果たした。東アジアで暮した人々にとって、これらの経済的・技術的な方面における目覚ましい動きは、百万年を遥かに超える旧石器時代の長い歴史には絶えてみられなかった大事件であり、かくて人類は旧石器文化の壁を乗り越えて、新しい歴史の局面へと突入する契機を得たのであった。

土器の発明と使用は、旧石器時代以来の技術知識の要素を組み合わせた成果で、人類史上最初の技術革新と考えられている。土器は粘土を材料として、加熱した水に溶けない焼き物である。粘土はごく微小な粒子の集合体であるが、この粘土粒子はまた、さらに微細な鉱物の結晶が集合したものである。粘土の主成分であるこの粘土鉱物は硅素 (Si)、アルミニウム (Al)、酸素 (O) の原子に水酸基 (OH) が結合した珪酸アルミニウムである。粘土粒子のまわりに水分子が吸着しており、それらが鎖状に連結している。この連結が外からの力で切れたりつながったりすることによって粘土の可塑性が生ずると考えられている。粘土は 500°C~600°C に熱すると粘土鉱物の結晶中の酸素イオンが水分子となって追い出され、内部の原子の配列状態が変化して別の鉱物に変身する。これは粘土が乾燥して固まる可逆的な変化とはちがって、もはや元の粘土に戻ることはない。

土器は、人間がこのような粘土の特性を認識した上で、それを容器の製作に導入したものであり、V.G. チャイルドはこれを「人間が化学変化を自覚して利用した最初のものである」と評した⁽¹⁾。土器は耐火性、耐水性、可塑性という3つの優れた特性を合わせもった容器である。特に直接火にかけることができるという点で、人類が最初に手にすることのできた煮沸用具であった。それは食料の有効な調理と対象範囲の著しい拡大など直接食生活に大きな変革をもたらしただけでなく、その波及効果は生活様式から体質や寿命に至る様々な面に及んだと言える。また材料の入手と加工が容易なことから、多様な形や大きさの容器を大量に作り出すことが可能となった。そして、社会の発展とともに多様化する容器への要求は、原始・古代を通じて主として土器によって満たされることになった。

土器の登場は人類進歩の過程でこのような重要な位置を占めたわけであり、しかも、その後長い時期にわたる製作技法の発展は、絶えず人類の生活条件を改善しており、それ故に土器の起源という問題が世界各地で重要課題とされる所以である。

1

中国での土器の出現をめぐる問題については、長い研究の歴史があり、いくつかの重要な遺跡が発見されており(図1)、研究者の注目を集め続けてきた。1962年、仙人洞(Xianrendong) 洞穴遺跡の発掘調査によって中国大陸で最古の土器の探求の研究が始まった。

仙人洞洞穴遺跡は江西 (Jianxi) 省万年 (Wannian) 県城東北 15kmの小河山の麓にあって、石灰岩の洞穴遺跡であり、

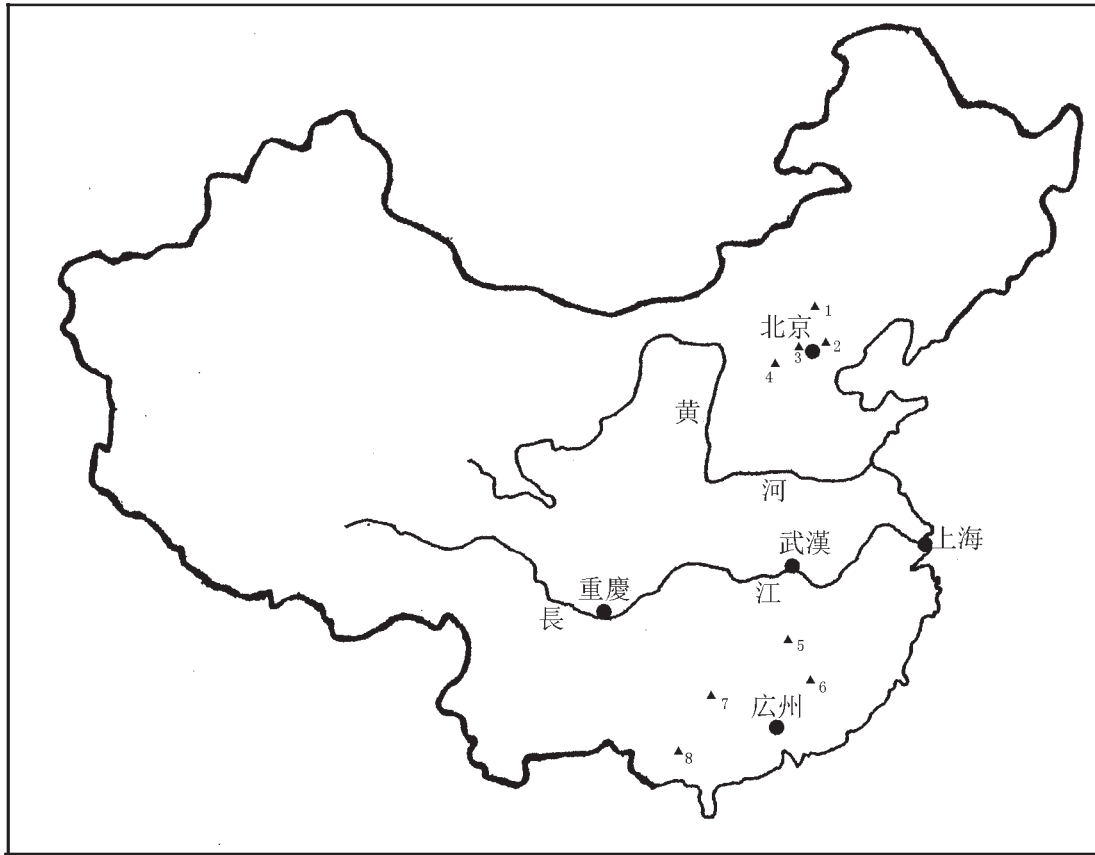


図1. 中国大陸における最古土器の主要な出土地点
 1 于家溝遺跡、2 転年遺跡、3 東胡林遺跡、4 南莊頭遺跡、5 玉蟾岩遺跡、
 6 仙人洞遺跡と吊桶環遺跡、7 玉蟾岩遺跡、8 甌皮岩遺跡

洞口が東南に向っている。遺物を包含する厚い堆積層が洞口に集中していて、面積は約 100m²である。1962年3～5月と1965年4月に2回発掘され、発掘面積は69m²ほどであった。新石器文化層は2m近く堆積して、上、下2つの大きな層に分かれている。当遺跡を代表するこの2段階の文化内容は、内在的な文化的関連をもつと同時に、比較的大きな差異をもっている。仙人洞遺跡下層で焼土堆積遺構21基、灰坑2基および土器、石器、骨角器と大量の動物遺存体が発見された。下層の獣骨を測定したC14年代は未校正で8,825 ± 240年B.P.を示した⁽²⁾。その後、中国社会科学院考古研究所はこの地域の特殊性(石灰岩地区)によって測定誤差が出ている可能性があると指摘し、結論として、仙人洞遺跡下層の理化学年代は約9,000年B.P.以上と判定した⁽³⁾。仙人洞遺跡下層の土器の特徴は明確である(図2)。これらはすべて夾砂紅色土器で、焼成温度は低く、色調は均一でない。器壁の厚さは0.7～0.8cmの間にあり、最も厚いものは1.5cmに達する。内壁は平らでなく凹凸がみられる。混和材は主として石英粒である。これ以外の胎土をもつものはみられない。多くの土器が粗いまたは細密な縄文で飾

られていて、その中で粗い縄文が約90%を占めている。非常に特徴的な点は土器の内面にも一般に縄文がスタンプされていることである。口縁の外面に1～2列の円窩文をスタンプしたものなどもある。また、少数ながら、縄文や円窩文上に朱を塗った例もある。器種構成は単純で、基本的な形態は口縁部がまっすぐに立ち上がるか、やや斜めに広がり、胴部が直線的な丸底罐形器の1種類である。

その後、仙人洞遺跡と同一地域の華南地区に位置する甌皮岩(Zengpiyan)洞穴遺跡で、大体同じ古さの土器も検出された。甌皮岩洞穴遺跡は広西(Guaxi)壮族自治区桂林(Guilin)市の南約9kmにある独山の西南麓に所在する。洞口は西南に向かい、現在の地表面から5mの高さのところに位置する。1973年6月から9月にかけて発掘され、発掘面積は約60m²であった。厚さ0.8m近く堆積した新石器文化層が発掘されたが、なお基底部に至っていない。第2層のカルシウム層をはさんで、早、晩両期に分かれている。早期文化遺物の年代はC14年代測定法によって測定誤差を除いて9,000B.P.より古いと判定された。また熱ルミネセンス法によると甌皮岩遺跡の早期文化遺物の絶対年代は

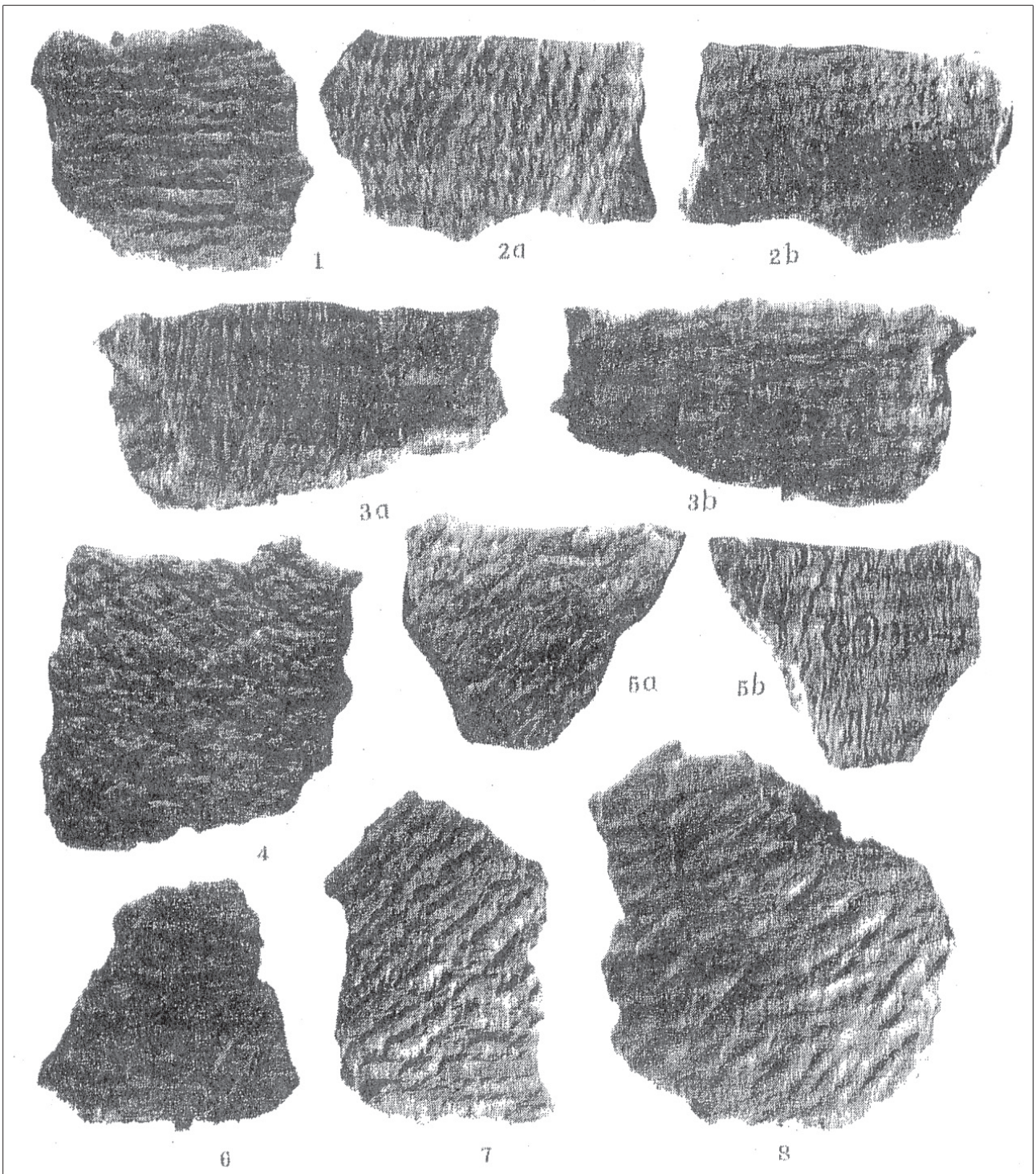


図2. 仙人洞遺跡下層出土した土器片

10、 370 ± 870 年 B.P.、9、 $550 \pm 1,100$ 年 B.P.、9、 240 ± 620 年 B.P. を示した。早期の文化層の中で、焼土、灰坑、墓 18 基と土器、石器、骨角器および大量の動物遺存体が発見された。その外、洞内奥の窪みの中で、当時の人々が貯蔵していたひとまとまりの石材が発見された。その中に少量の石器の未成品と廃品が含まれており、かつてここで道具の製作が行われたことが明らかとなった⁽⁴⁾。

甌皮岩遺跡の早期文化遺物のうち、土器の主体は粗砂・細砂混じりの紅色土器と灰色土器である。焼成温度は低く、約 680°C である。器壁の厚さは均一ではなく、最も厚いものは 2.6cm、一般的な厚さは 0.5～0.7cm である。土器の表

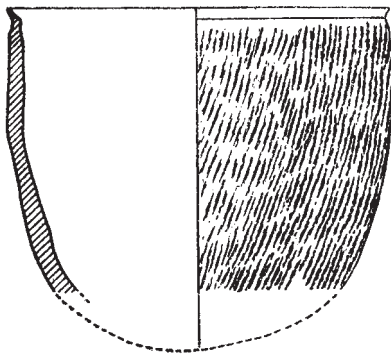


図3. 甌皮岩遺跡の早期文化の土器

面には多くの場合縄文が施され、他に篋描き文、席文（乾燥する前の土器が筵のうえに置かれた際についたもの）、篋目文がある。甌皮岩早期文化遺物には、器形が復元できるものはないが、土器片を観察した結果、最も多い器種は罐で、次に釜、鉢、甕などが用いられていることが明らかとなった。その大部分は長胴で壁が比較的直線的で、丸底のものである。口縁部が主として広口で、外に、口縁が真っ直ぐに立ち上がったもの、内湾したものがある（図3）。

20世紀の80年代末、南庄頭（Nanzhuangtou）遺跡において華北地区で初めて10,000年前の土器が検出された。南庄頭村は河北（Hebei）省徐水（Xushui）県城の北12kmにあり、この位置は太行山脈東麓の先端、華北平原西部の縁辺にあたる。遺跡は南庄頭村の東2kmの苹河（Pinhe）と鷄爪河（Jizhuahe）の間にあり、面積は約20,000m²である。1986年から1987年に発掘され、発掘面積は約60m²である。土器、石器、骨角器および大量の動物と植物の遺存体が発見された。C14年代測定法によって理化学年代は10,815±140年B.P.～9,690±50年B.P.の間に測定されている⁽⁵⁾。

南庄頭遺跡では15点の土器片が発見されたにとどまり、その土器の形を復元できなかった（図4）。胎土質はいずれも夾砂深灰色のものと夾砂紅褐色のものであり、混和材は砂粒とともに、雲母やドブガイの粉末などが含まれている。深灰色のものは器壁が厚く、焼成温度が低く、胎土が脆い。混和材は砂粒が主で、内外の色はほぼ一致する。器形は厚い口唇をもつ口縁部が内湾した罐類と考えられている。紅

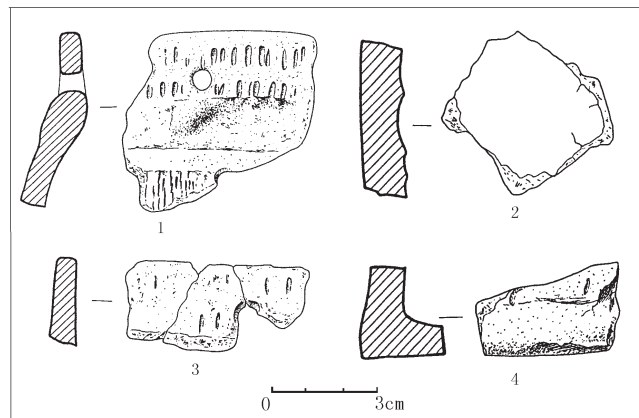


図4. 南庄頭遺跡から出土した土器破片

褐色のものは器壁が薄く、焼成温度が前者より少し高い。混和材は雲母やドブガイの粉末および砂粒が含まれている。器形は丸い口唇をもつ口縁部が真直に立ち上がった罐類と鉢類である。南庄頭の土器の表面は多くが無文であり、少数のものには貼付文が施されている。

20世紀の90年代から、10,000年B.P.を超す新石器時代最早期の遺跡が中国大陸の各地で次々と発見されている。1993～1995年、中米共同調査隊によって、仙人洞（Xianrendong）遺跡の再調査とその付近の吊桶環（Diaotonghuan）遺跡などの6つの洞穴遺跡の発掘調査が行われた。これらの遺跡の最下層の年代はC14年代測定法により約16,000年B.P.～15,000年B.P.と測定されている。これらの層からは骨角製銛や細石刃と共に野生稲のプラントオパールが検出されており、当時の人々が狩猟、漁労を行った他、野生稲を採集し始めた可能性があると推測される。その上層の文化層の年代は約13,000年B.P.～11,000年B.P.であり、この時期には最初の土器が作られた。さらに上層の堆積層の年代は約11,000年B.P.～10,000年B.P.であり、文化内容は60年代に調査された仙人洞遺跡下層のものと同じである⁽⁶⁾。1993年と1995年、湖南省道（Dao）県玉蟾岩（Yuchanyan）遺跡の10,000年B.P.の堆積層からは土器片4点が検出された⁽⁷⁾。1995年から1998年にかけて、河北省陽原（Yanyuan）県于家溝（Yujiagou）遺跡において約10,000年B.P.の土器片が発見された⁽⁸⁾。これらの発掘調査によって、中国大陸における土器の起源は10,000年B.P.に遡ることが明確となった。

2001年、甌皮岩遺跡の再調査は華南地区の最古土器の認識に対して重要な資料を提供していた⁽⁹⁾。今度の再調査によって、甌皮岩遺跡の文化堆積は五期に分かれ、C14年代測定法によると12,000年B.P.～7,000年B.P.に位置することが判明した。第一期の年代は約12,000年B.P.～11,000年B.P.であり、打製石器にともなって、土器も発見されていた。この土器は口縁部が広口で、浅い体部を有する丸底のものである。器壁が厚く、焼成温度がかなり低く（ 250°C に超えない）、胎土が脆い。混和材は砂粒が主である。表面は無文で、口縁部の近くに回転縄文の痕跡が見える（図5）。

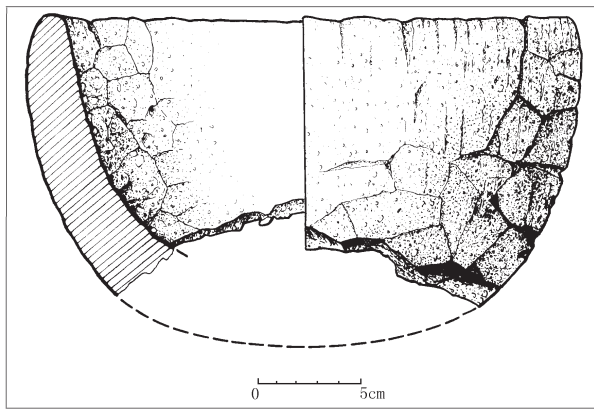


図5. 甌皮岩遺跡第一期から出土した土器

華南地区において、10,000年を超える土器はいくつかの遺跡で発見されている。その中で、重要な遺跡が広西(Guanxi) 壮族自治区柳州(Liuzhou) 市鯉魚嘴(Liyuzhui) 遺跡第3層、来賓(Laibin) 県芭拉洞(Baladong) 遺跡、南寧(Nannin) 市豹子頭(Baozhitou) 遺跡、隆林(Longlin) 県老磨槽洞(Laomechaodona) 遺跡、靈山(Linshan) 県滑岩洞(Huayandong) 遺跡、桂林(Guilin) 市大塘城(Datanchen) 遺跡、廟前冲(Miaoqianchong) 遺跡、広東(Guangdong) 省懷集(Huaji) 県大砂岩(Dashayan) 遺跡、青塘(Qintang) 県朱屋岩(Zhuwuyan) 遺跡、吊珠岩(Diaozhuyan) 遺跡、黄門(Huangmen) 1号洞、2号洞、3号洞遺跡、潮安(Chaoan) 県石尾山(Shiweishan) 遺跡などである⁽¹⁰⁾。これらの大多数は内陸地区に集中している。海岸地帯にある遺跡は潮安石尾山の1つのみである。大多数は洞穴遺跡であるが、貝塚、段丘上の遺跡もある。土器の登場はこれらの遺跡から出土する文化遺物の重要な特徴である。各遺跡でいずれも土器が出土しているが、全て土器片であり、数量も多くない。これらの土器の共通点は、全て砂粒が混入されており、粗製で焼成温度が低いことがあげられる。色調は均一ではなく、紅色と赤褐色が主体であり、灰色、褐色、黒色などのものもみられる。主要な文様として縄文がみられる。他に、篋描き文、篋目文もある。

上記に述べた今まで発見された資料によって、中国においては、10,000年を超える土器は大体に二つの地域に集中している(図1)。一つは南嶺山脈以南の華南地区である。もう一つは太行山脈東麓、燕山山脈の南麓の先端と華北平原西部の縁辺にあたる華北地区西北部である。華南地区では約16,000年B.P.から10,000年B.P.までの土器がかなり検出されていた。これらの最古土器と伴う遺物はそれぞれの特徴を持っていたが、共通性が強い。石器は打製石器を主として、器種も単一で、ほとんどが礫器である。磨製石器はすでに登場したが、数が少なく、主に石斧などの刃部だけを磨いていた。それに対して、骨と貝殻で作られた道具の量が多い。華北地区の西北部では、前に述べた南莊頭遺跡、于家溝遺跡のほか、北京市の軒年(Zhuannian) 遺跡⁽¹¹⁾、東胡林(Donghulin) 遺跡⁽¹²⁾では約10,000年B.P.に

近い土器も発見されていた。資料が少ないため、この時期の文化内容などについては十分な理解がなされていない状況にある。

2

日本列島においては、土器の登場は約13,000年前のことである。1960年に長崎県福井洞穴遺跡の発掘調査が行われ、第3層から粘土紐を貼り付けた隆線文土器が細石刃、第2層から爪形文土器が細石刃とともに出土し、さらに、第3層のC14年代測定法による年代は12,000年B.P.～13,000年B.P.と測定された⁽¹³⁾。C14年代測定法に対する懐疑論も存在した当時は、アジアにおいて飛び抜けて古い土器の年代に対して国内外から少なからぬ疑問が投げられた。その後50年近くの発掘調査は福井洞穴の研究成果の正確性を証明し、さらに複数時期で多様な出現期の土器の存在を明らかにしている。

今まで発見された資料によると、日本列島における最も古い土器は無文土器である。青森県大平山元1遺跡⁽¹⁴⁾、神奈川県上野遺跡第1地点第II文化層⁽¹⁵⁾、茨城県後野遺跡⁽¹⁶⁾などでは無文土器が検出されていた。発見された資料はすべて小破片であるが、縦断面はおそらく平底の底部から胴部にかけて外湾しながら、口縁部にかけて直立する鉢形か深鉢形が想定できる。内外面に煮沸に使用したことを示す炭化物が付着している。これらの土器片はいずれも大きな槍先形尖頭器と局部磨製石斧、石刃を素材とするスクレイパーと彫刻刀形石器などを特色とする『神子柴系石器群』が伴っている。大平山元1遺跡の土器に付着した炭化物などを試料に行ったAMS法C14測定年代は12,680±140年B.P.～13,780±170年B.P.である。上野遺跡第1地点第II文化層の熱ルミネッセンス法による測定年代は12,800±630年B.P.である。無文土器の年代の測定例がまだ少ないが、青森県長者久保遺跡の神子柴系石器群は、12,660±150年B.P.の八戸火山灰の下位から出土しており、神子柴系石器群と伴っている無文土器の年代が13,000年B.P.～14,000年B.P.であると推定できる。なお、神奈川県寺尾遺跡⁽¹⁷⁾、相模野No.149遺跡⁽¹⁸⁾などでは、上野遺跡第1地点第II文化層に相当する地層からは押圧文土器が発見された。これらの土器は段状に厚く作られた口縁部に細い棒状の道具か篋状道具によって施文するものである。押圧文土器の厚手の口縁部は次の時期の隆線文土器群の祖型となったという説もある⁽¹⁹⁾。

無文土器に続いて登場するのは豆粒文と隆線文土器群である。上野遺跡第1地点第II文化層より上位の第I文化層から隆線文土器が検出しており、隆線文土器は無文土器より新しいことが分かった。豆粒文・隆線文土器群の年代はC14年代測定法によって、一般的に12,000年B.P.～13,000年B.P.前後に位置している。豆粒文土器は泉福寺洞穴遺跡の調査成果によって命名されたものである⁽²⁰⁾。これは長楕円形の粘土粒を口縁部では縦位か斜位に等間隔に、胴部上半では横位に垂下して貼り付けている丸底の深鉢形土器である。豆粒文土器は九州西北部を中心に分布して、

隆線文と組み合わせて施文される場合もある。隆線文土器は粘土紐貼り付け、または篋状の工具の移動によってみみずばれ状の隆起部を作り出した文様を付けた深鉢形土器である。時期の変遷について、太い隆線(隆帯)から細隆線、微隆線への変化と横隆線の数の増加の趨勢が窺える。隆線文土器群の起源と系譜については、最初の豆粒文、豆粒文を付加する隆線文が九州西北部のみ分布し、次に隆線文と細隆線文が九州から東北地方まで分布するが、最後に微隆線文が東北地方に偏在することと理解できる。つまり、この土器群は九州から東日本へ伝播し、無文土器と入れ替わりながら青森県まで達していた。豆粒文・隆線文土器群と伴う石器は九州西北部で西海技法による福井型細石刃核を特徴とするものである。本州と四国の隆線文土器と伴う石器は石刃技法を喪失した神子柴系石器群に新たに有舌尖頭器が加わったものである。東北地方の微隆線文土器と伴う石器は有舌尖頭器が減少し、神子柴系石器群に石鏃や篋状石器が加わったものである。

福井洞穴遺跡や泉福寺洞穴遺跡の層位的な関係は、隆線文土器群の次に爪形文土器群の段階に入ることを物語っている。爪形文土器は九州の南部から東北地方の北部に分布し、さらに北海道の帯広市大正3遺跡⁽²¹⁾からも発見されている。C14年代測定法によると、爪形文土器群はおおよそ12,500年B.P.に出現し、10,000年B.P.頃まで主体的に存在することが分かった⁽²²⁾。爪形文土器の器形は深鉢で、口縁部がやや内湾し胴部が大きく外湾し底部が丸底の例、口縁部が外傾する乳房状尖底の例がある。文様には細めのものや太目で半月形の斜行のもの、ハの字形のもの、羽状のものがあり、器表面全体に横走するものが多い。爪形文土器群と伴う石器は九州西北部では依然として細石刃である。九州南部では細石刃と石鏃、磨石、石皿などである。本州では槍先形尖頭器、局部磨製石斧などの神子柴系石器群に、有舌尖頭器や石鏃などが伴う。

爪形文土器群に続く段階は多縄文土器群である。多縄文土器群は押圧縄文、絡条体圧痕文、回転縄文を施文した土器である。多縄文土器群には爪形文が同一器面に部分的に施文するものや、少数の爪形文土器と共存する場合もある。この土器群は大体に近畿地方以東の本州東部に分布する。C14年代測定法によると、多縄文土器群はおおよそ11,500年B.P.に出現し、草創期末の9,500年B.P.頃まで存続することが分かった⁽²³⁾。この時期、近畿以西の土器には、泉福寺洞穴遺跡で爪形文土器の文化層より上から見つかった押引文などがある⁽²⁴⁾。そのほか、福岡県柏原遺跡群E・F遺跡⁽²⁵⁾では草創期に属する条痕文地文で口縁部に円孔文をめぐらす土器も発見されていた。多縄文土器群と伴う石器には、局部磨製石斧、エンドスクレイパー、槍先形尖頭器、有舌尖頭器、篋状石器、石皿などがある。神子柴系石器群や有舌尖頭器などが少なくなり、石鏃や礫器などが安定して存在する段階に移行しつつあることを示している。

朝鮮半島においては、最近、新石器時代遺跡の調査例の増加につれて、初期新石器資料も徐々に蓄積されている。その中で、最も注目されたのは高山里(Gosanli)遺跡の発見である⁽²⁶⁾。高山里遺跡から出土した土器は、ほとん

どが土器片である。胎土に植物もしくは獣毛が混入された繊維質混入土器とそれらを含まない砂質胎土の土器とに大別できる。繊維質混入土器は基本的に無文様であるが、口縁部に二歯具による斜位の刺突点列文を施したのも1点発見された。砂質胎土の土器もやはり無文様のものと多歯具による反復刺突文(之字形文)や密な刺突文が施されたものとに分かれる。高山里遺跡出土の繊維質混入土器の年代については、熱ルミネッセンス法の測定結果が10,500年B.P.である⁽²⁷⁾。高山里遺跡と類似する資料は金寧里(Kumnyengli)遺跡、梧津里(Ojinli)遺跡などで発見されていた⁽²⁸⁾。しかし、これらの資料は南部地区に限定されており、さらに、断片的な資料を体系的に論じることのできる段階にはまだ至っていないというのが現状である。

3

今までの資料によると、10,000年B.P.頃に、中国大陸、日本列島、朝鮮半島を含む東アジアにおける、土器が既に安定して存在したことは明確である。土器の登場はさらに16,000年cal B.P.～15,000年cal B.P.頃に遡る。つまり、東アジアにおいて、16,000年cal B.P.～15,000年cal B.P.頃に、人類は土器作りを試みるのが始まり、10,000年B.P.頃に至って、土器が人類の生活に不可欠の道具の一つとして定住的な生活に入ってきた。

興味深いのは、この時期は最古ドリラス期、と古ドリラス期、新ドリラス期の三つの寒冷期を挟んでその前後に温暖期が展開するという地球規模の気候変動があった時期である。このような気候変動によって、東アジアの各地では植生や動物相もかなり変化していた。その厳しい自然環境の中で、人類の生計も新たな手段を開発しなければならない。土器の発明は当時の気候変動における適応戦略の一つである。土器は人類が最初に手にすることのできた煮沸用具として、食料の有効な調理と対象範囲の著しい拡大など直接食生活に大きな変革をもたらした。さらに、遊動する人類は定住生活に移行してきたことが可能になっていた。日本列島では狩猟採集に依然として生活基盤を置いていたが、中国の華南地区では野生のイネ科植物の種子を利用し、稲作を試みるのが始まった。これは煮沸用具である土器の登場することと直接につながっていたことである。

この更新世から完新世への気候変動はグローバルなものであるが、花粉分析や古地理のデータにもとづいて、最終氷期盛期の東アジアの北部は乾燥気候が卓越し、レス(黄土)と乾燥した草原が広がっていた。一方、長江以南の中国大陸から海面の低下によって陸化した東シナ海には、海沿いにカシヤシイ類を中心とする照葉樹林が、内陸部と北方には針葉樹林と落葉広葉樹林の混合林が生育していた。最終氷期の東アジアには、北と内陸部の草原地帯、南と海岸部の森林地帯という異質な2つの生態地域が明白なコントラストをもって分布していた⁽²⁹⁾。考古学資料からみれば、中国大陸における土器の起源は南と北の二つの独立の中心地域がある。一つは南嶺山脈以南の華南地区である。もう一つは太行山脈東麓、燕山山脈の南麓の先端と華北平原西部

の縁辺にあたる華北地区西北部である。華南地区では石灰岩洞穴がかなり密集しており、恵まれた亜熱帯自然環境が早期人類に豊かな生活場所を提供していた。山脈から平原へ過渡する華北地区西北部では、多様な自然環境が新たな文化要素の養成に不可欠な生活基盤となっていた。この二つの地域はかなり離れて、自然環境、遺跡の立地、土器と伴う石器群の構成などの面から、別々の文化系統に属するはずである。すなわち、土器の発現期から、南と北では各々の道を歩いてきたことが明らかになった。

華南地区においては、発現期の土器と伴う石器群がいずれも礫器・剥片石器である。それに対して、華北地区西北部では細石刃を主体とする。巨視的にみれば、華北地区西北部の資料が日本列島とのなんらかのつながりが窺える。豆粒文・隆線文土器群と伴う石器は九州西北部で西海技法による福井型細石刃核を特徴とするものである。この技法はそれまで九州にあった矢出川技法による野岳・休場型細石刃核や船野技法による船野型細石刃核と異なることから、朝鮮半島が華北地区から新たに渡来した細石刃技術の可能性がある⁽³⁰⁾。于家溝遺跡では約10,000年B.P.を超える土器片が楔型石核と共存することが発見されたが、断片的な資料で、詳しいことが十分な理解がなされていない状況にある。今後、日本列島と華北地区西北部の最初土器の系統の問題については、さらなる資料の蓄積が期待される。

注

- (1) V・G・チャイルド著、ねず・まさし訳 『文明の起源』 岩波新書 1951
- (2) 江西省文物管理委員会 「江西万年仙人洞洞穴遺址試掘」 『考古学報』 1963年1期、江西省博物館 「江西万年大源仙人洞洞穴遺址第二次発掘報告」 『文物』 1976年12期
- (3) 中国社会科学院考古研究所炭十四実験室等 「石灰岩地区炭十四様品の信頼性と甌皮岩等遺址的年代問題」 『考古学報』 1982年3期
- (4) 広西文物工作隊等 「広西桂林市甌皮岩洞穴遺址試掘」 『考古』 1976年3期
- (5) 保定地区文物管理所等 「河北徐水南荘頭遺址試掘簡報」 『考古』 1992年11期、金家広 徐浩生 「浅議徐水南荘頭新石器時代早期遺存」 『考古』 1992年11期
- (6) 劉詩中 「江西仙人洞和吊桶環遺址発掘獲重要進展」 『中国文物報』 1996年1月28日、嚴文明 「世界最古の土器と稲作の起源」 『季刊考古学』 第56号 1996
- (7) 袁家栄 「玉蟾岩獲水稻起源重要新物証」 『中国文物報』 1996年3月3日
- (8) 泥河湾聯合考古隊 「泥河湾盆地考古発掘獲重大成果」 『中国文物報』 1998年11月5日
- (9) 中国社会科学院考古研究所 『桂林甌皮岩』 文物出版社 2003年
- (10) 焦天龍 「更新世末至全新世初期嶺南地区的史前文化」 『考古学報』 1994年1期
- (11) 郁金城ほか 「北京転年新石器時代早期遺址の発見」 『北京文博』 1998年第3期。
- (12) 東胡林考古隊 「北京新石器早期考古的重要突破」 『中

- 国文物報』 2003年1月7日
- (13) 鎌木義昌・芹沢長介 「長崎県福井洞穴」 『日本の洞穴遺跡』 平凡社 1967年
- (14) 大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団編 『大平山元Ⅰ遺跡の考古学調査』 大平山元Ⅰ遺跡発掘調査団 1999年
- (15) 大和市教育委員会 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』 大和市文化財調査報告書第21集 1986年
- (16) 後野遺跡調査団編 『後野遺跡—関東ローム層中の石器と土器の文化』 勝田市教育委員会 1976年
- (17) 神奈川県教育委員会編 『寺尾遺跡』 神奈川県埋蔵文化財調査報告 18 1980年
- (18) 相模考古学研究会編 『相模野第149遺跡：相模考古学研究会による発掘調査の記録』 大和市文化財調査報告書 第34集大和市教育委員会 1989年
- (19) 大塚達郎 『縄文土器研究の新展開』 同成社 2000年
- (20) 麻生優編 『泉福寺洞穴の発掘記録』 築地書局 1985年
- (21) 帯広市教育委員会 「大正3遺跡出土の爪形文土器（特集：東アジアの土器のはじまり）」 『考古学ジャーナル』 519号 2004年
- (22) 鹿又喜隆 「更新世末から完新世初頭にみられる人類の環境適応」 『宮城考古学』 第9号 2007年
- (23) 同(22)
- (24) 同(20)
- (25) 山崎純男 『柏原遺跡群』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 90 福岡市教育委員会 1983年
- (26) 済州大学校博物館 『済州高山里遺跡(図版)』 1998年
- (27) 崔夢龍 「21世紀韓国考古学の潮流と展望」 『第27回韓国上古史学会学術発表会発表要旨』 韓国上古史学会 2002年
- (28) 田中聡一 「韓半島——土器出現期の様相」 『季刊考古学』 第83号 2003年
- (29) 安田喜憲 「東亜稲作半月弧と西亜麦作半月弧」 『稲作陶器和都市の起源』 文物出版社 2000年
- (30) 九州旧石器文化研究会編 『九州の細石器文化Ⅲ』 九州旧石器文化研究会 2000年